

エンカウンター (ENCOUNTER)

第264号

2024年4月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より（9）

御霊によって歩く

「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。」、(ガラテヤ書 5.16)

キリスト教道徳、我々のキリスト教生活というものは、御霊によって歩くということでもあります。「御霊によって歩く」ということはどうすることか、これが即ち、我々キリスト者の生活の全部です。我々、このことを理解することが誠に薄い。そうですから、われわれの肉に対する勝利というものが現れてこない。何十年やっておりますても一向に、信仰のご利益というか、その効果が現れて来ません。何十年経っても未信者と変わらない。あるいは未信者よりも劣っています。どうしても我々は、パウロの言う「御霊によって歩め」ということを知り、これを学び、また、実行する必要があるのであります。

キリスト者の自由

「もしあなたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。」(ガラテヤ書 5. 18)

これは前の 16 節とよく似た主張でありまして、われわれが神の霊、聖霊に導かれるならば、律法・道徳の下に縛られてはいない。御霊に従って生活するのである、と。我々は律法・道徳に縛られた生活か、あるいはそれに縛られない自由奔放な生活、この二つしか考えられませんが、パウロはそのどちらでもない「御霊に従う生活」を主張しております。これが即ち「キリスト者の自由」であります。

人間の生まれつきのままの欲望

「肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は、神の国を継ぐことがない。」

(ガラテヤ書 5.19-21)

これは、人間の生まれつきのままの欲望であります。その欲望を赤裸々に出せばこうなります。これらは、大体4つに分けられます。即ち、第1は、不品行、汚れ、好色で、これは色欲に関する露わなものであります。我々はどんなに聖人顔をしておりましても、本当の生来の欲望というものはそのようなものあります。第2は、偶像礼拝、まじない、これは神に対する信仰の間違いであります。これも、我々の生来の欲望です。神ならざるこの世のものを求めています。第3は、8つあります。敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、であります。初めの4つは心の中の状態であり、後の4つはそれが外へ現れた状態であります。これらは我々の生来の欲望ですが、我々はちょっとそれをカモフラージュしているだけであります。第4は、泥酔、宴楽。これは食欲の欲望です。「色食は性なり」と言いますが、ほおっておけば人間はこうなります。私は教育において、人間の生まれつきのままを伸ばしたらよい、という教えはもつてのほかであると思います。

御霊の実

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、
自制であって、これらを否定する律法はない。」(ガラテヤ書 5. 22-23)

この「御霊の実」は単数であります。前の「肉の働き」は複数です。御霊を受けた者は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制。私は、これはアガペーが展開しているものと思います。神から頂いたものは、自分で持っていることが分かたらよいが分からない。むしろ反対です。自分は何と愛のないことよ、なんと喜びのないことよ、何と平和のないことよ、と思うのは持っている人の自覚であります。自分は愛を持っている、喜びがある、平和がある、と言っているような人は、ちょっとまゆつばのような気がします。持っている人は、自分で分からなくても、第三者から見ればわかります。本当に、愛、平和、喜びを持っている人がおります。大体は落第ですが。大抵の信者はまだ聖霊を受けていない。しかし、聖霊を受け、本当に愛、平和、喜びを持っている人がおります。私の知った人に数人おります。不思議です。そういう人は、自覚において、何も持っていないようです。反対です。本当の金持ちは、きっと自分で金を持っていることは分からない。相手に、あなたは株券を持っている、やれ銀行預金が沢山ある、土地を多く持っている、税金が多いなどと、傍から見たらわかります。自分で金持ちだと思ふような人は、小金持ち。私はそう思います。

御霊によって歩め

「もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もう
ではないか。」(ガラテヤ書 5.25)

またここで、16節と同じことをパウロは言っています。我々は、このことを一生かかって、真剣になって勉強する必要があります。このことを解せずして、キリスト教を解したとは言えない。これが鍵です、どうしても。少し神がかっていますが、キリスト教は「聖霊教」であります。聖霊を受けずして、キリスト教は存在しません。キリスト教の道德がこの世の道德と違うところは、聖霊を受けて、聖霊に導かれて、聖霊に励まされて、道德を行なうところにあります。クリスチャンは猛省を要します。

「信仰と望み」を持って生きること

パウロは、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである。」

(ガラテヤ書 2. 19-20)、自分が現在生きているのは、イエスを信じるによる、と言いました。私は、この「御霊によって生きる」ということは「イエス・キリストを信じて生きる」ことであり、もう一つは、「わたしたちは、御霊の助けにより、信仰によって義とされる望みを強く抱いている。」(5.5)

「義とされる望み」これは復活する望みです。私は、「御霊によって生きる」ということは「イエス・キリストを信じて、神の子とせられた」と言ってよいと思います。自分の力ではなく、イエス・キリストの十字架によって、救われて、神の子とせられるのであるという「信仰」、復活させて頂くという「望み」

(この望みは、「熱心を持って望む (long for)」という言葉)を持って生きること、すなわち「信仰と望み」を持って生きること、私は、それを「御霊によって生きる」ことであると思います。私の 60 年の生活はかくの如し。ですから私の歌に、「主イエスと呼びて」とありますが、これは「信仰」です。「み国めあてに」は「望み」であります。こういう私の生活は、聖霊によって導かれました。こう私は信じています。

イエスを救い主なり、という告白は、聖霊が臨んだ証拠

「御霊に導かれ」の「御霊」を「イエス・キリスト」に置き換えてもよい。御霊あるいはキリストに導かれる、というのはどういうことか、と言えば、イエスを救い主と信じて、そして天国を目当てにして生きることです。我々に聖霊が臨んで、この信仰と望みが起る。生まれつきの者は、自分が神の子であるという信仰、復活の望みというものを持ってはいない。生まれつきの者は、食欲、性欲その他の精神上的欲を持つ。これが持って生まれたものです。信仰、復活の望みは、聖霊によって臨むものです。コリント前書において、パウロは、聖霊によらなければ、イエスを主ということは出来ない、と言いました。イエスを救い主なり、という告白は、聖霊が臨んだ証拠であります。救い主である、ということは我々に永遠の生命が与えられた、ということでもあります。我々が救い主を告白できないということは、まだ聖霊を受けていない、未信者ということでもあります。いくら説明しても繰り返しになります。

どうぞ、聖霊を受けて、信仰と復活の望みを持って、力強く生活することを望みます。

霊の実はいろいろな形で現れる

キリスト教道徳は、度々申し上げております通り、聖霊を受けて、そしてそれが我々の行為として現われるものでありまして、これが普通の道徳、即ち、努力奮闘して自分が行う道徳とは根本的に違います。我々キリスト教を聞いていながら、福音ということを知らない。神の賜物である聖霊を知らなければ、キリスト教を全然知らないということになります。それは求道者の状態であります。我々は特に、ガラテヤ書、ロマ書を学んでその道徳の違いを知るのであります。

我々は、福音の効果として「自由」「愛 (アガペー)」、「霊によって歩むこと」についてすでに3回にわたって学びました。しかし、これは同じことでありまして、即ちパウロが、前回において、「霊の結ぶ実は、これこれである」(第5章)と言っておりますけれども、この「実」というのは単数であります。霊の実一つが、色々に現れてくる。本日学びます「自他の荷を負う」ということもそうですが、一つの霊の賜物が現れた姿を各方面から説明しているに過ぎません。

互いに重荷を負い合いなさい

「互いに重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう。」(ガラテヤ書 6.2)

この「互いに重荷を負い合いなさい」は、原語では、「互いの重荷」と、形容詞になっており、文章の最初に出て来ていますので、最も重要な言葉となっています。「重荷」という字は、特に人間の弱さ、それによって起こる罪、過ちによる荷であります。そういう重荷を負う。これは、自分も他人も同じ重荷を負っているから、互いにそれを負え、という意味であります。ですから、他人の重荷は自分と無関係ではありません。同じことであります。自分もその地位になったら、それをやる。他人のことですから、あれはけしからん、これはけしからんと言いますが、大抵は、自分もその立場に立ったら、同じことをやらざるを得ない。己の弱さ、己が如何なる者であるかを知っている者は、他人の過ちに対して無関心たるを得ない。これが「互いの重荷」であります。そうすればキリストの愛、アガペーを全うするであろう、と。「律法」と「恵み」とは、パウロの独壇場であり、パウロの特徴がここにあります。このことを明らかにしたのはパウロです。ヨハネ、ペテロといえども、このことについて、パウロほど明瞭にしてはおりません。

この世では旅人

「もしある人が、事実そうでないのに、自分が何か偉い者であるように思っているとすれば、その人は自分を欺いているのである。」(ガラテヤ書 6. 3)

私は、この節が今日の教えの底を流れている中心思想であると思います。…

私は福音以外に人にこれを知らず道はないと思います。鏡がなければ自分の顔は見えません。大体の人は、自分が相当のものであると思っています。そこまで思わなくとも、人にちょっとでも侮辱されたら、憤慨します。俺も悪いが、お前も悪い、と。人間は自分が何者かであると確信しています。生まれつき、仏教でいえば、前世から、そういう癖、習性を持っています。私は、この壁を打ち破るものは福音であると思います。

もしもこの壁が破れたら、我々は本当の自由、本当にアガペー、本当に霊によって歩む人となります。神の子とされ、そして天国を目当てに歩む、即ち、この世では旅人である、という精神が起こって来る。自分が何者かであると思っているうちはそういう精神は起こって来ません。

謙 遜

パウロ自身、自分がコリント人への手紙において、自分は何者でもなく、自分は無に等しい、と言いました。本当に我々が無 (nothing) であると分かるまでは福音は分かりません。神の贖いということが映って来ません。本当に偉い人は、自分は何者でもないことを知っている人であります。パウロ、ルッター、オーガスチン、内村鑑三、みんな自分は何者でもないということを知り、無に等しいということを知っている人であります。みんな謙遜です。牧師として説教している時はいばっているでしょうが、本当にその人に接して、一緒に食事でもして見給え、実に謙遜です。自分が正しいと思っているから、人を責めるのです。

我々の終生の事業

マタイ伝7章3-5節にある次のような言葉を思い起こします。

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁（はり）を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟に向かって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることが出来るだろう。」

自分の梁（はり）を取った人が他人の目のちりを取ることが出来るのであります。自分自身を教える人が他人を教えることが出来る。牧師は自分の信仰を見たらよろしい。そうすれば、間接的に信者の信仰をみる事ができる。夫は自分自身の行いを正したらよろしい。そうすれば、自然と妻の行ないを正す事が出来るようになる。これは、分かり切ったことではありますけれども、我々はこれが出来ない。出来ないという自分の姿、自身をよく知って、福音の恵みと与かり、聖霊を受けて、そしてこの聖書の教える真理に近づく者になりたいものであります。これは、我々の終生の事業です。